

27年漁期 すけとうだら漁獲可能量(TAC)案について

資料2-4

(単位:万トン)

魚種	系群	資源状態		ABClimit(日本EEZ)					TAC				備考
		水準	動向	24年	25年	26年	27年	漁獲シナリオ (管理基準)	24年	25年	26年	27年 (案)	
すけとう だら													<p>【27年TAC設定の考え方】</p> <p>【日本海北部系群】 中期的管理方針に則して「③親魚量の増大(0.74万トン)」と同数のTAC(案)7,400トンとする。</p> <p>【オホーツク海南部】 中期的管理方針を踏まえ、ロシア水域とのまたがり資源であることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である24年漁期の52,023トンに基づき、TAC(案)53,000トンとする。</p> <p>【根室海峡】 中期的管理方針を踏まえ、ロシア水域とのまたがり資源であることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である23年漁期の19,115トンに基づき、TAC(案)20,000トンとする。</p> <p>【太平洋系群】 中期的管理方針に則して「②親魚量の維持(17.7万トン)」と同数のTAC(案)177,000トンとする。</p>
	日本海北部	低位	減少	0.77 (0.78)	0.76 (0.65)	0.65 (0.90)	0.74	親魚量の増大 (③)	1.3	1.3	1.3	0.74	※TACの管理期間は、「4月～翌年3月」
	オホーツク海南部	中位	増加	-	-	-	-	-	3.7 (5.9)	5.2	5.3	5.3	
	根室海峡	低位	横ばい	-	-	-	-	-	1.2 (2.0)	2.0	2.0	2.0	
	太平洋	中位	減少	15.2 (17.9)	16.6 (18.0)	15.7 (21.0)	17.7	親魚量の維持 (②)	17.1 (18.8)	17.1 (18.0)	17.1 (21.0)	17.7	
合計									23.3 (28.0)	25.6 (26.5)	25.7 (29.6)	25.74	

注1)オホーツク海南部及び根室海峡は、詳細な生態や資源状況が不明なことから、ABCの算定を行っていない。

注2)太平洋は、24年及び25年に先行利用(各1万トン)の配分を実施。(利用実績はなし)

注3)ABClimit欄下段()書きは、再評価の数量。 TAC欄下段()書きは、先行利用分を除いた期中改定後の数量。

資源評価結果

すけとうだら	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ(管理基準)	2015年漁獲量(千トン)	評価			2013年親魚量	Blimit
	水準	動向				10年後にBlimitへ回復する確率	10年後に2006年度親魚量を上回る確率	10年間Bbanを回避する確率		
日本海北部系群	低位	減少	< Blim	ABClimit					38千トン	140千トン
				*① 親魚量の増大(10年でBlimitへ回復)(Frec10yr)	1.5	43%	100%	100%		
				*② 親魚量の増大(20年でBlimitへ回復)(Frec20yr)	5.8	8%	97%	100%		
				*③ 親魚量の増大(30年でBlimitへ回復)(Frec30yr)	7.4	3%	90%	100%		
			*④ 親魚量の増大(わずかでも親魚量を増大)(0.9Fsus)	9.9	0%	68%	99%			

すけとうだら	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ(管理基準)	2015年漁獲量(千トン)	評価		2013年親魚量	Blimit
	水準	動向				5年後にBlimitを維持する確率	10年後にBlimitを維持する確率		
オホーツク海南部	中位	増加	—	—	—注1	—	—	—	未設定
根室海峡	低位	横ばい	—	—	—注1	—	—	—	未設定
太平洋系群	中位	減少	> Blim	ABClimit				313千トン	151千トン
				*① 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	135	100%	100%		
			*② 親魚量の維持(Fsus)	177	99%	93%			

注1)オホーツク海南部及び根室海峡については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、ABCの算定は行っていない。

注2) * のついたシナリオが中期的管理方針に合致する。

27年漁期 するめいか漁獲可能量(TAC)案について

(単位:万トン)

魚種	系群	資源状態		ABClimit					TAC				備考
		水準	動向	24年	25年	26年	27年	漁獲シナリオ (管理基準)	24年	25年	26年	27年 (案)	
するめいか	<p>【中期的管理方針】 高、中位にある資源が海洋環境の変化により大幅減少に転じる可能性があることから、資源動向の把握に努めつつ、海洋環境条件に応じた資源水準の維持を基本方向として管理を行う。資源水準の変動に際しては、関係漁業者の経営への影響が大きくなりすぎないように配慮を行うものとする。</p>											<p>【27年TAC設定の考え方】 冬季発生系群及び秋季発生系群について、中期的管理方針に則して、ベースとするABCを漁獲シナリオ「①又は②親魚量の維持の予防的措置(冬季発生系群19.4万トン、秋季発生系群40.2万トン)」とし、これらの合計値に基づく59.6万トンから、韓国の直近5年平均の漁獲量17.1万トンを控除した42.5万トンをTAC数量とする。</p>	
	冬季発生	中位	横ばい	27.1	25.1	19.3	19.4	親魚量の維持の予防的措置(①)					
	秋季発生	高位	横ばい	38.6	39.7	28.1	40.2	親魚量の維持の予防的措置(②)					
合計				65.7 (33.9)	64.8 (32.9)	47.4 (30.1)	59.6 (42.5)		33.9	32.9	30.1	42.5	

(注1) 下段()書きについては、日本EEZの値。25年までは我が国EEZにおける漁獲割合から算出。26年以降は合計値から韓国の直近5年平均の漁獲量を控除して算出。

(注2) 26年のABCは管理期間を1月～12月から4月～3月に変更し、再計算した値。

【資源評価結果】

<参考> Blimitと親魚量

	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ (管理基準)	2015年 漁獲量 (万トン)	評価		2014年 親魚量	Blimit
	水準	動向				5年後に 2014年親魚 量を維持す る確率	5年後に Blimitを維持 する確率		
冬季発生系群	中位	横ばい	>Blim	ABClimit				30.1万トン	親魚量 19.0万トン
				*① 親魚量の維持の予防的措置(0.8Fmed)	19.4	73%	90%		
				*② 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	21.3	62%	84%		
				*③ 親魚量の維持(Fmed)	23.3	49%	74%		
秋季発生系群	高位	横ばい	>Blim	ABClimit				111.3万トン	親魚量 40.1万トン
				*① 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	23.5	36%	91%		
				*② 親魚量の維持の予防的措置(0.8Fmed)	40.2	24%	83%		
				*③ 親魚量の維持(Fmed)	48.6	17%	77%		

注) *のついたシナリオが中期的管理方針に合致する。

(参考)

近年の韓国のするめいか漁獲実績※1

(単位:トン)

漁期年(平成)	冬季発生系群	秋季発生系群	合計
15年	83,602	159,934	243,536
16年	68,036	130,975	199,011
17年	64,966	122,657	187,623
18年	74,241	126,737	200,978
19年	75,429	92,892	168,321
20年	65,805	109,570	175,375
21年	69,690	114,881	184,571
22年	72,285	97,340	169,625
23年	100,111	79,182	179,293
24年	68,876	88,514	157,390
25年	85,722	77,910	163,632

直近5年平均	79,337	91,565	170,902
平成27年ABC	194,000	402,000	596,000

※1: 日本EEZにおける韓国の漁獲は除く。

注1. 赤の数字は直近5年間の最大漁獲量

注2. 青の数字は直近5年間の最小漁獲量